

男性役割意識化エピソードとその時の 認知や感情に関する探索的検討¹⁾

筑波大学大学院人間総合科学研究科 渡邊 寛²⁾

筑波大学人間系 松井 豊・佐藤 有耕

An exploratory investigation of the perceptions and emotions when males are conscious of male roles

Yutaka Watanabe (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Yutaka Matsui and Yuhkoh Satoh (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Based on four domains of a male-roles model, this study, targeting males ranging in age from 10s to 50s, investigates whether males feel that they have to accept male roles or they feel compelled by others to conform to these roles, as well as the emotions experienced at such times. The results indicate that, in addition to “negative emotions and rejections of male roles”, as noted in prior studies, the males also reported both “passive acceptance” and “positive emotions and adaptive behaviors”. Moreover, the results also suggest that emotions vary according to respondent age, the episodes that involve male roles, as well as the presence of others at the time. Finally, the paper discusses the implications of these findings and the prospects for future studies.

Key words: male roles, episodes, emotions

内閣府(2014)によると、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に対して、1992年には賛成が60.1%、反対が34.0%であったが、2014年には賛成44.6%、反対49.4%となり、現在では約半数の者が仕事と家庭における役割を男女で分けることに對して否定的な意見を持っていた。この調査を踏まえると、男性も仕事だけでなく、家庭役割などほかの役割を担うべきと考えられるようになってきていると考えられる。しかし、性別役割への態度が変容する一方で、男性の家事関連時間は、ほとんど増

加していない(総務省統計局, 2011, 2017)。したがって、男性は、「男は仕事をすべき」といった伝統的な男性の性別役割(以下、男性役割とする)以外の役割も求められているものの、実態として、男性は仕事以外の役割を担えていないと考えられる。このような中で、2010年代には、男性の生きづらさに関するメディア報道(NHK, 2014)や評論(奥田, 2015・2016; 田中, 2015; 海原, 2016)が相次いでいる。それらでは、一様に、男性が伝統的な男性役割に沿おうとする姿や、伝統的な男性役割と家庭役割などの新たな役割をどちらも担う難さが描かれている。海外の先行研究では、このような男性役割による葛藤やストレスが、男性自身の心身の健康を損ねる(Eisler, Skidmore, & Ward, 1988; Levant, Wimer, Williams, Smalley, & Noronha, 2009)だけで

1) 本研究の一部は、日本発達心理学会第29回大会で発表された。

2) 日本学術振興会

連絡先: yuhkohst@human.tsukuba.ac.jp (佐藤有耕)

なく、女性への暴力やセクシュアル・ハラスメントに結びつく (Mellon, 2013; Moore & Stuart, 2005; Smith, Parrott, Swartout, & Tharp, 2015) ことも明らかになっている。したがって、男性役割に沿わなければならないと感じたり、誰かから沿うことを求められることは、男性自身だけでなく、男性を取り巻く人間関係にも深く影響を及ぼすと考えられる。しかし、日本では、男性が、そもそものような場面で男性役割を求められ、どのように感じているかに関する知見が乏しい。

そこで、本研究では、どのような場面で、男性が男性役割に沿わなければならないと思ったり、他者から男性役割に沿うことを求められたのか、その時にどのような気持ちや受け止め方をしたかについて、探索的に検討する。以下では、男性役割による男性の葛藤と心理的適応、男性役割の構造の順に先行研究を紹介し、本研究の目的を改めて述べる。

男性役割による男性の葛藤と心理的適応

男性役割と男性の心理的不適応の関連を説明するパラダイムとして、gender role strain paradigm (Pleck, 1981, 1995) がある。このパラダイムでは、女性よりも男性が伝統的な性役割に背くことの方が、深刻な結果をもたらすことから、男性は伝統的な男性役割に沿わなければならない、その期待に沿おうとすることや沿うことに失敗することが、男性にとって心理的負担になるとされる。

このパラダイムに則り、男性役割による葛藤やストレスを測定するために用いられる尺度が、Gender Role Conflict Scale (GRCS; O'Neil, Helms, Gable, David, & Wrightsman, 1986) と Masculine Gender Role Stress Scale (MGRS; Eisler & Skidmore, 1987) である。GRCS は、O'Neil et al. (1986) がアメリカの男子大学生を対象に作成した尺度で、4 因子から成る。「地位・力・競争」では、社会的な地位を得ることや成功することの重要性、「情動の制限」では、情動を人に見せることへの困難さ、「男性間の情動的行為の制限」では、ほかの男性に対して、親密な感情を見せたり、行為をしたりすることへの忌避感、「仕事と家庭の葛藤」では、仕事と家庭役割や日々の生活を両立する難しさについて、それぞれの程度あてはまるかを回答する。合計得点が高いほど、男性役割による葛藤が高いと判定される。MGRS は、Eisler & Skidmore (1987) がアメリカの男子大学生を対象に作成した尺度で、5 因子から成る。「身体的不適応」では、身体の健康や運動神経のよさ、身体的な男らしさを言われたり比べられたりすること、「情動表現の欠如」では、パートナーに感情を伝えた

り、ほかの男性に親密な行為を行うこと、「女性への従属」では、女性よりも成果が劣ったり、低い地位に就くこと、「知的劣等感」では、決断力のなさや人から感情的と言われたり、自分より仕事ができる人と働いたりすること、「パフォーマンスの失敗」では、失業や昇進の失敗、金銭的な損失、性的行動の失敗について、それぞれの程度ストレスに感じるかを回答する。合計得点が高いほど、男性役割によるストレスが高いと判定される。

これら2つの尺度を用いた研究により、男性役割による葛藤やストレスが、怒りや不安、抑うつや精神的不健康の高さ、自尊感情の低さに結びつくことが明らかにされている (Cournoyer & Mahalik, 1995; Eisler, Skidmore, & Ward, 1988; Rice, Fallon, Aucote, & Möller-Leimkühler, 2013; Rice, Fallon, & Bambling, 2011; Sharpe & Heppner, 1991; Wester, Christianson, Vogel, & Wei, 2007)。日本では、林 (2005) が GRCS を邦訳し、男性役割葛藤尺度日本語版 (JGRCS) を作成した。JGRCS を用いた、林 (2005) や品川他 (2007)、和田 (2006) では、男性役割による葛藤が高いほど、自尊感情が低く、不安や抑うつ、孤独感が高かった。

他方で、男性役割のポジティブな側面も議論されている。例えば、臨床現場では、男性クライアントに対して、自己信頼、勇敢さやリスク・テイクなど、男性役割の強みを生かしたアプローチを行うことの有用性が指摘されている (Englar-Carlson & Kiselica, 2013; Kiselica & Englar-Carlson, 2010)。また、日本の教育現場では、男子に対して、「自立していけるような男らしさ」を獲得させようとしていることが、質的研究により明らかにされている (知念, 2013; 土田, 2008)。これらの知見を踏まえると、男性役割を求められた時、男性はネガティブな感情を抱く以外にも、前向きに捉えたり、受け入れたりしている可能性も考えられる。

以上をまとめると、GRCS や MGRS では、仕事や家庭に関すること、身体的な男らしさ、情動表現、高い地位に就いたり、女性に対して劣位にあったりすることについて、男性がどの程度葛藤やストレスを感じているかを測定していた。また、GRCS や MGRS を用いた研究では、男性役割による葛藤やストレスが、男性のネガティブな感情や不適応と結びついていた。しかし、先行研究では、男性役割によるネガティブな影響にのみ焦点化されていた。加えて、先行研究では、どのような場面で、男性役割による葛藤やストレスを感じるのかについては、詳細に検討されず、自分自身で男性役割に沿わなければならないと思った時に生じているのか、誰かに男性

役割に沿うことを求められた時に生じているのかについては、判別されていなかった。

男性役割の構造

以上に挙げた先行研究では、「男は仕事をするべき」、「男は強くあるべき」といった伝統的な男性役割に主に焦点が当てられてきた。一方で、渡邊(2017)は、男性役割が、伝統的な男性役割の5側面(「社会的地位の高さ」、「精神的・肉体的な強さ」、「作動性の高さ」、「女性的言動の回避」、「女性への優位性」)と、新しい男性役割の4側面(「女性への気遣い」、「家庭への参加」、「共同性の高さ」、「強さからの解放」)から成ると提示した。その上で、渡邊(2017)は、伝統的な男性役割と新しい男性役割の各側面を照らし合わせ、それぞれを対応付ける4領域があることを提唱した。第1の領域は、「社会的地位の高さ」と「家庭への参加」から成る「家庭の領域」である。第2の領域は、「精神的・肉体的な強さ」、「女性的言動の回避」、「強さからの解放」から成る「心身の強さの領域」である。第3の領域は、「作動性の高さ」と「共同性の高さ」から成る「望ましい人間のあり方の領域」である。第4の領域は、「女性への優位性」と「女性への気遣い」から成る「女性への振る舞い方の領域」である。

この知見を踏まえると、男性役割は、伝統的な側面のみでは捉えられないと考えられる。しかし、男性役割による男性の葛藤やストレスの研究では、伝統的な側面が主に検討され、新しい側面は検討されてこなかった。したがって、海外の研究で用いられているGRCSやMGRSの各因子だけでは、男性役割に沿わなければならないと思ったエピソードや、その時の気持ちや受け止め方が、網羅的に把握されていない可能性が考えられる。

本研究の目的

以上のように、男性役割は、伝統的な男性役割の5側面と新しい男性役割の4側面から成り、それらに対応付ける4領域があると考えられた。しかし、先行研究では、伝統的な男性役割に主に焦点化され、男性役割による男性の葛藤やストレスにのみ焦点が当てられていた。このため、どのような場面で、誰から男性役割に沿うことを求められ、男性がどのような気持ちや受け止め方をしたかは、詳細に明らかにされてこなかった。そこで、本研究では、男性役割の4領域を踏まえて、男性が男性役割に沿わなければならないと思ったり、他者から男性役割に沿うことを求められた(以下、男性役割意識化とする)エピソードと、その時の気持ち・受け止め方を詳細

に明らかにするために、大学生と社会人を対象に面接調査を行う。

方 法

調査期間

2017年4月から7月に実施した。

調査対象者

筑波大学の男子大学生23名と、20代から50代の社会人男性15名を対象に調査を行った。

調査者および調査場所

面接調査実施者は、第1著者(男性、当時25歳)であった。面接場所は、大学生の場合は、筑波大学人間系学系棟の実験室で行った。社会人の場合は、原則、筑波大学文京校舎のゼミ室で行ったが、面接参加者の希望に応じて、都内または横浜市内のカフェでも実施した。

募集方法および倫理的配慮

本研究は、筑波大学人間系研究倫理委員会の審査を受け、承認を得て行われた(筑波28-128)。

面接調査の参加者のうち、大学生については、授業時間の前後に面接調査の説明を行い、面接調査への参加を希望する者に対して、メールアドレスの記入を求めることで、募集を行った。社会人については、筑波大学の社会人大学院を通じて募集を行った。後日、面接調査への参加を希望した大学生および社会人に対して、面接調査の案内と参加可能日時を尋ねるメールを送付し、参加の都合がついた者に対し、面接調査を実施した。

面接調査を実施するにあたっては、倫理的配慮を行った。具体的には、面接調査を実施する前に、面接調査実施者である第1著者が、口頭および文書により、以下の内容を説明した。実施所要時間は、約60分程度であること、面接調査中には、適宜休憩をとることができること、面接調査で得られた結果によって、参加者が不利益を被ることはないこと、面接調査に参加しない自由があること、面接調査実施中いつでも面接調査協力の同意を撤回することができること、面接調査協力で同意しない場合でも、参加者が不利益を被ることはないこと、得られたデータは、第三者により個人が特定できない形で扱うこと、研究には個人が特定できる情報を削除・修正して書き起こした文章(二次資料)を使用し、個人が特定される形で公表・発表されることはないこと、研究終了後、面接の様子を録音したデータを保存し

た電子媒体（ICレコーダー）のデータを完全に削除することであった。その上で、面接調査に同意できる場合には、同意書への署名を求めた。同意書に署名をした参加者に対して、面接調査を実施した。同意書に署名しなかった参加者および面接調査中または面接調査後に同意撤回書に署名したいと申し出た参加者はいなかった。

面接内容

アイスブレイクとして、男子大学生には、学部や出身地域、サークル、アルバイトなどを尋ねた。社会人には、仕事の内容、勤めている組織の男女比、転職の有無などを尋ねた。

続いて、自分で男性役割に沿わなければならないと思ったり、他者から男性役割に沿うことを求められたエピソードについて、「男らしく振る舞わなければならないと思ったり、それを誰かから言われた経験はありますか」と尋ねた。経験が挙がった場合には、自分で思ったのか、誰かに言われたのか（以下、相手とする）、その時、どのような気持ち・受け止め方をしたか（以下、認知や感情とする）について尋ねた。経験が語られない場合には、男性役割の4領域（渡邊，2017）ごとに具体的に尋ね、語られた場合は、上記と同様に相手と認知や感情を尋ねた。詳しい内容は、Table 1の通りであった。

結 果

対象者の属性

面接対象者の属性について、大学生は、平均年齢19.35歳（ $SD=1.27$ ）であった。出身地域は北海道・北日本6名、関東・東海11名、西日本・沖縄6名であったが、皆、実家を出て現在は一人暮らしをしていた。恋人がいる者は5名であり、サークルは1名を除いて所属しており、アルバイトは11名が行っていた。


社会人は、平均年齢42.73歳（ $SD=10.30$ ）であった。恋人がいる者は2名、配偶者がいる者は10名、子どもがいる者は7名であった。業種は、システム・メディア関係4名、学校・大学関係4名、公務員2名、その他4名、無職1名であった。職種は、営業・販売・企画・製造職が3名、事務職が4名、専門職が7名、専業主夫が1名であった。

男性役割意識化に関する自由記述の分類

男性役割意識化エピソードと、その時の認知や感情それぞれについて、社会心理学を専攻する大学院生2名（うち1名は第1著者）が、内容の類似性に基づいて回答を分類し、社会心理学を専門とする教員が分類内容を確認した。

その結果、男性役割意識化エピソードに対する回答からは、「弱さを見せてもいいと思った・いいと言われた」（12件）、「弱さを見せてはいけないと思った・言われた」（39件）、「身体的な男らしさがあれば

Table 1
面接における質問内容

エピソード (全体)	尋ね方 (例)
 家庭 の領域	男性らしく振る舞わなければならないと思ったり、それを誰かから言われた経験はありますか (上記の質問で経験が語られない場合、下記の通り4領域ごとに経験の有無を尋ねた。 尋ねた順番は対象者によって異なる)
	男性として、仕事をしなければならない、いい収入を得なければならない、稼ぎ手にならなければいけないなど、何か感じたり、誰かから言われたことはありますか
心身の強さ の領域	男性として、家事や育児をすることなど、何か感じたり、誰かから言われたことはありますか
	男性として、体力がなければいけない、筋肉がなければいけない、運動神経がないといけいなど、何か感じたり、誰かから言われたことはありますか
望ましい 人間の あり方の領域	男性として、泣いてはいけない、弱音を吐いてはいけないなど、何か感じたり、誰かから言われたことはありますか
	男性として、リーダーシップをとらなければいけない、周りを引っ張らなければいけないなど、何か感じたり、誰かから言われたことはありますか
女性への 振る舞い方 の領域	男性として、女性に気遣わなければいけない、女性を引っ張らなければいけないなど、何か感じたり、誰かから言われたことはありますか
	男性として、女性との接し方で迷ったり悩んだりしたことはありますか

いいと思った・言われた」(47件),「女性との接し方で迷った・困った」(91件),「自分の女性的な振る舞いに対して悩んだ・指摘された, 性別を分けることに疑問を持った」(32件),「リーダーシップをとったり, しっかりしないといけないと思った」(69件),「家庭内での振る舞いを考えた・指摘された」(28件),「働かなくてはいけない・職場で悩んだ」(40件),「勉強・進路・就職・将来について悩んだ」(23件)の9カテゴリーが生成された(Table 2)。これらのカテゴリーに含まれなかった回答は「その他」(6件)としたが, 同カテゴリーは, 以降の分析には含めなかった。

男性役割意識化時の認知や感情に対する回答からは,「受け入れた」(140件),「人に見られたくない」(109件),「できない・嫌い・しなくてよい」(91件),「仕方がない・社会がそうだから」(78件),「プレッシャーに感じる」(75件),「男女の違いを意識する」(71件),「性別は関係ない」(69件),「やった方がいいから・必要だからやる」(185件),「よく思われたい・悪く思われたくない」(127件),「肯定的に捉えた・楽になった」(111件),「やりたい・得意・好き」(88件),「つらかった・ストレスだった・落ち込んだ」(151件),「違和感・疑問・反感」(149件),「困った・悩んだ・不安だった・焦った」(138件),「嫌・面倒くさい」(123件)の15カテゴリーが生成された(Table 3)。これらのカテゴリーに含まれなかった回答は「その他」(73件)としたが, 同カテゴリーは, 以降の分析には含めなかった。

男性役割意識化エピソードの属性や相手による差

属性による差 男性役割意識化エピソードの属性による差を検討するために, 属性(「大学生」,「社会人」)別の9カテゴリーの男性役割意識化エピソード数を算出し, χ^2 検定を行った。その結果, 0.1%水準で有意な連関がみられた($\chi^2(8)=41.73$, $p<.001$, Cramer's $V=.33$)。残差分析の結果,「リーダーシップをとったり, しっかりしないといけないと思った」では,「大学生」が有意に多く(46件),「社会人」が有意に少なかった(23件)。「家庭内での振る舞いを考えた・指摘された」では,「社会人」が有意に多く(22件),「大学生」が有意に少なかった(6件)。「働かなくてはいけない・職場で悩んだ」では, 社会人が有意に多く(30件),「大学生」が有意に少なかった(10件)。「勉強・進路・就職・将来について悩んだ」では,「大学生」が有意に多く(19件),「社会人」が有意に少なかった(4件)。このほかのエピソードについては, 属性による有意な差

はみられなかった。

相手による差 男性役割意識化エピソードの相手は,「自分」が59.9%,「家族(父母, 祖父母, 親せき)」が11.0%,「妻・元妻」が1.8%,「恋人・元恋人」が

Table 2
 男性役割意識化エピソードのカテゴリーと発言例

カテゴリー (発言例)	件数
弱さを見せてもいいと思った・いいと言われた (弱さを見せてもいいと思った・いいと言われた)	12
弱さを見せてはいけないと思った・言われた (弱音を吐いてはいけないと思った) (泣いてはいけないと思った・言われた)	39
身体的な男らしさがあればいいと思った・言われた (身体的な強さを求められた) (男らしい身体・運動ができることに憧れていた)	47
女性との接し方で迷った・困った (女性のアプローチの仕方・性的話題に関して悩んだ) (女性をリードするべきだと思っている) (女性との接し方で悩んだ)	91
自分の女性的な振る舞いに対して悩んだ・指摘された, 性別を分けることに疑問を持った (自分の女性的な振る舞いに対して悩んだ・指摘された) (性別を分けることに疑問があった)	32
リーダーシップをとったり, しっかりしないといけないと思った (リーダーシップをとらないといけないと思う) (しっかりしないといけないと言われた・思った)	69
家庭内での振る舞いを考えた・指摘された (子どもに関わりたいたいと思っている・いた) (家庭内では役割分担・調整をすればいいと思う)	28
働かなくてはいけない・職場で悩んだ (働かないといけないと思っている) (男は働くということを言われた・求められた) (仕事の厳しさ・疑問を感じる)	40
勉強・進路・就職・将来について悩んだ (勉強・進路・就職について指摘された) (将来に対して不安がある・あった)	23
その他 (その他)	6
計	387

3.1%,「友人」が9.0%,「上司・先輩」が4.1%,「同僚・周りの人」が5.4%,「先生」が3.6%,「その他」が2.3%であった。なお、複数の相手を挙げたエピソードが7件あった。

対象者の属性(「大学生」,「社会人」)と相手のクロス表は, Table 4の通りであった。「妻・元妻」は,大学生ではみられなかった。「友人」や「先生」は,大学生が多く,社会人が少なかった。「上司・先輩」

Table 3
男性役割意識化時の認知や感情のカテゴリーと発言例

クラスター	カテゴリー (発言例)	件数
消極的 受容	受け入れた (そういうものだと思う) (受け入れた・慣れた)	140
	人に見られたくない (人に見られたくない・心配されたくない) (弱いところを見せたくない)	109
	できない・嫌い・しなくてよい (苦手・できない・嫌い) (する必要はない)	91
	仕方がない・社会がそうだから (選択肢がないと思った) (仕方ないと思った)	78
	プレッシャーに感じる (プレッシャーに感じる) (大変だなと感じる)	75
	男女の違いを意識する (男女で役割に違いがあると思う) (生物学的な)性差を意識する)	71
	性別は関係ない (性別は関係ないと思う) (適材適所で)	69
		633
	やった方がいいから・必要だからやる (できる方がいいと思う) (必要だからやる)	185
	よく思われたい・悪く思われたくない (よく思われたい) (悪く思われたくない)	127
肯定的 感情・ 取り入れ	肯定的に捉えた・楽になった (うれしい・ありがたい) (励みになった・頑張ろうとした)	111
	やりたい・得意・好き (自分がやりたい・得意・好き) (人にしてあげたい)	88
		511
	つらかった・ストレスだった・落ち込んだ (ネガティブな気分・ストレス) (つらかった)	151
否定的 感情・ 拒否	違和感・疑問・反感 (不自由な感じがする) (男であることが嫌)	149
	困った・悩んだ・不安だった・焦った (困った・戸惑った) (焦った・必死だった)	138
	嫌・面倒くさい (嫌だった) (面倒くさいと思った)	123
		561
その他	その他 (人に期待している) (うらやましい) (自分が納得した人生を歩みたい)	73
		73
	計	1778

や「同僚・周りの人」は、大学生が少なく、社会人が多かった。「自分」や「家族（父母、祖父母、親せき）」は、大学生、社会人ともに一定数みられた。なお、以下の分析では、自分で男性役割に沿わなければならないと思ったか、他者から男性役割を求められたかによる違いが重要と考え、相手のカテゴリーは、「自分」カテゴリーと、そのほかすべてを併せた「他者」カテゴリーの2カテゴリーとした。

Table 4に基づき、相手（「自分」、「他者」）と属性（「大学生」、「社会人」）による χ^2 検定を行ったところ、有意な連関はみられなかった（ $\chi^2(1)=0.73$, *n.s.*, Cramer's *V*=.04）。

次に、相手（「自分」、「他者」）別の9カテゴリーの男性役割意識化エピソード数を算出し、 χ^2 検定を行った。その結果、1%水準で有意な連関がみられた（ $\chi^2(8)=24.94$, $p<.01$, Cramer's *V*=.26）。残差分析の結果、「勉強・進路・就職・将来について悩んだ」において、「他者」が有意に多く（18件）、「自分」が有意に少なかった（5件）。このほかのエピソードについては、相手による有意な差はみられなかった。

男性役割意識化時の認知や感情の構造

Table 2より、「その他」を除いた男性役割意識化エピソードは計381件で、それらは9カテゴリーに分類されたが、各回答者が複数のエピソードを回答していた。そこで、1つのエピソードを1サンプルとして、Table 3の男性役割意識化時の認知や感情の15カテゴリーそれぞれについて、発言があるエピソードの場合は2、発言がないエピソードの場合は1として数値化し、数量化Ⅲ類を行った。1軸、2軸、

3軸のカテゴリースコアを算出したところ、固有値は順に.107, .095, .084であった。1軸は「発言あり」が正の方向、「発言なし」が負の方向に布置され、サイズ因子がみられたことから、2軸と3軸のカテゴリースコアを用いてクラスター分析（ウォード法）を行い、3つのクラスターを抽出した。「発言あり（2）」のカテゴリースコアのプロット図とクラスターをFigure 1に示す。

第1のクラスターは、「男女の違いを意識する」、「プレッシャーに感じる」、「仕方がない・社会がそうだから」、「性別は関係ない」、「できない・嫌い・やらなくてよい」、「人に見られたくない」、「受け入れた」でまとまるクラスターで、「消極的受容」と名付けた。このクラスターは、第1・2象限にまとまった。第2のクラスターは、「よく思われたい・悪く思われたくない」、「やった方がいいから・必要だからやる」、「やりたい・得意・好き」、「肯定的に捉えた・楽になった」でまとまるクラスターで、「肯定的感情・取り入れ」と名付けた。このクラスターは、第4象限にまとまった。第3のクラスターは、「つらかった・ストレスだった・落ち込んだ」、「困った・悩んだ・不安だった・焦った」、「嫌・面倒くさい」、「違和感・疑問・反感」でまとまるクラスターで、「否定的感情・拒否」と名付けた。このクラスターは第3象限にまとまった。

男性役割意識化時の認知や感情の差

属性による差 数量化Ⅲ類によって算出された1軸、2軸、3軸のサンプルスコアを従属変数として、属性（「大学生」、「社会人」）による対応のない t 検定を行った。その結果、サイズ因子がみられた1軸

Table 4
男性役割意識化時の相手に関する、対象者の属性別の割合（%）

	計	大学生		社会人	
		<i>n</i>	%	<i>n</i>	%
自分	234	133	(56.8)	101	(43.2)
他者	157	87	(55.4)	70	(44.6)
家族（父母、祖父母、親せき）	43	28	(65.1)	15	(34.9)
妻・元妻	7	0	(0.0)	7	(100.0)
恋人・元恋人	12	7	(58.3)	5	(41.7)
友人	35	33	(94.3)	2	(5.7)
上司・先輩	16	1	(6.3)	15	(93.8)
同僚・周りの人	21	3	(14.3)	18	(85.7)
先生	14	12	(85.7)	2	(14.3)
その他	9	3	(33.3)	6	(66.7)
合計	391	220	(56.3)	171	(43.7)

では、0.1%水準で有意であり ($t(379)=3.92$, $p<.001$), 「大学生」 ($M=0.18$, $SD=1.02$) が正の方向, 「社会人」 ($M=-0.22$, $SD=0.94$) が負の方向であった。2軸では有意な差はみられなかった ($t(379)=1.20$, $n.s.$)。3軸では1%水準で有意であり ($t(379)=3.18$, $p<.01$), 「社会人」 ($M=0.18$, $SD=0.97$) が正の方向, 「大学生」 ($M=-0.15$, $SD=1.00$) が負の方向であった。

エピソードによる差 数量化Ⅲ類によって算出された1軸, 2軸, 3軸のサンプルスコアを従属変数として, 9カテゴリーの男性役割意識化エピソードによる1要因分散分析を行った。その結果, サイズ因子がみられた1軸では, 有意な差はみられなかった ($F(8, 380)=1.67$, $n.s.$)。2軸では, 1%水準で有意であり ($F(8, 380)=2.74$, $p<.01$), 「働かなくてはならない・職場で悩んだ」と「自分の女性的な振る舞いに対して悩んだ・指摘された, 性別を分けることに疑問を持った」に5%水準の有意差がみられた。前者 ($M=0.39$, $SD=0.16$) が正の方向, 後

者 ($M=-0.44$, $SD=0.17$) が負の方向であった。3軸では有意な差はみられなかった ($F(8, 380)=0.99$, $n.s.$)。

相手による差 数量化Ⅲ類によって算出された1軸, 2軸, 3軸のサンプルスコアを従属変数として, 男性役割意識化時の相手(「自分」, 「他者」)による対応のない t 検定を行った。その結果, 1軸では, 1%水準で有意であり ($t(379)=2.61$, $p<.01$), 「他者」 ($M=0.17$, $SD=1.04$) が正の方向, 「自分」 ($M=-0.11$, $SD=0.97$) が負の方向であった。2軸では1%水準で相手が有意であり ($t(379)=2.88$, $p<.01$), 「自分」 ($M=0.12$, $SD=0.98$) が正の方向, 「他者」 ($M=-0.19$, $SD=1.01$) が負の方向であった。3軸では有意な差はみられなかった ($t(379)=1.73$, $n.s.$)。

以上の結果から, 2軸と3軸で有意な結果がみられたカテゴリーに関しては, 見やすさのために平均値を10倍して Figure 1 にプロットした。

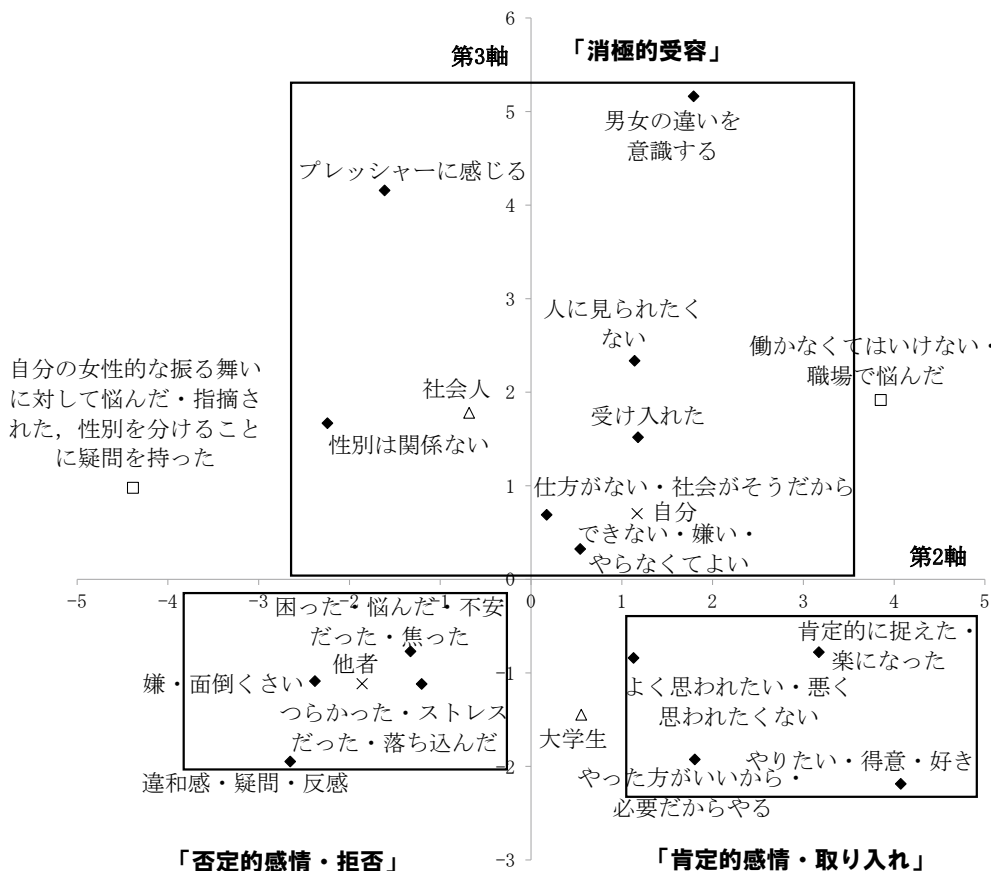


Figure 1. 男性役割意識化時の認知や感情に関するカテゴリープロット図。

男性役割意識化時の3種類の認知や感情の発話有無

男性役割意識化時の3種類の認知や感情の発話が、属性やエピソード、相手により異なるかを検討するために、男性役割意識化時の認知や感情に関する3クラスターごとに、発話の有無を2値化した。その上で、属性（「大学生」、「社会人」）による差を χ^2 検定により検討した。その結果、いずれの認知や感情においても有意な連関はみられなかった。

次に、9カテゴリーの男性役割意識化エピソードによる3クラスターの発話の有無の差を、 χ^2 検定により検討した。その結果、「否定的感情・拒否」のみで、5%水準の有意な連関がみられた（ $\chi^2(8) = 18.48, p < .05$, Cramer's $V = .22$ ）。残差分析の結果、「否定的感情・拒否」の発話は、「自分の女性的な振る舞いに対して悩んだ・指摘された、性別を分けることに疑問を持った」で有意に多く（25件）、「働かなくてはいけない・職場で悩んだ」で有意に少なかった（16件）。

続いて、相手（「自分」、「他者」）による3クラスターの発話の有無の差を、 χ^2 検定により検討した。その結果、「消極的受容」のみで、5%水準の有意な連関がみられた（ $\chi^2(1) = 3.93, p < .05$, Cramer's $V = .10$ ）。残差分析の結果、「消極的受容」の発話は、「自分」で有意に多く（171件）、「他者」で有意に少なかった（91件）。

考 察

本研究では、男性が、自分自身で男性役割に沿わなければならないと思ったり、他者から男性役割に沿うことを求められた（男性役割意識化）エピソードと、その時の男性の認知や感情を検討した。以下では、男性役割意識化エピソードとその時の認知や感情の構造を考察した後、男性役割意識時の認知や感情の違いを考察する。

男性役割意識化エピソードとその時の認知や感情の構造

面接により得られた発言から、エピソードの9カテゴリーと認知や感情の15カテゴリーをそれぞれ作成した。以下では、先行研究と本研究のカテゴリーの対応について述べる。

先行研究において、男性役割による葛藤を測定するGRCSは、「地位・力・競争」、「情動の制限」、「男性間の情動的行為の制限」、「仕事と家庭の葛藤」の4因子から成っていた（O'Neil et al., 1986）。また、男性役割によるストレスを測定するMGRSは、「身

体的不適応」、「情動表現の欠如」、「女性への従属」、「知的劣等感」、「パフォーマンスの失敗」の5因子から成っていた（Eisler & Skidmore, 1987）。

他方、本研究では、男性役割の4領域を用いることで、9カテゴリーの男性役割意識化エピソードがあることが明らかになった。このうち、「働かなくてはいけない・職場で悩んだ」や「勉強・進路・就職・将来について悩んだりした」は、学業や仕事、地位に関する内容であり、「家庭内での振る舞いを考えた・指摘された」は家庭に関する内容であった。これらは、公的な活動（仕事や学業）や私的な活動（家庭役割）における振る舞い、およびそれらの活動のバランスに関わる内容であることから、渡邊（2017）の「家庭の領域」に該当すると考えられる。先行研究では、GRCSの「地位・力・競争」、「仕事と家庭の葛藤」が類似する内容と考えられる。「弱さを見せてもいいと思った・いいと言われた」と「弱さを見せてはいけないと思った・言われた」は精神的な強さに関する内容で、「身体的な男らしさがあればいいと思った・言われた」は肉体的な強さに関する内容であった。これらは、渡邊（2017）の「心身の強さの領域」に該当すると考えられる。先行研究では、GRCSの「情動の制限」やMGRSの「身体的不適応」に相当していると考えられる。「リーダーシップをとった・とることに悩んだ」は、リーダーシップや集団内での意見調整に関する内容で、渡邊（2017）の「望ましい人間のあり方の領域」に該当すると考えられる。先行研究では、MGRSの「パフォーマンスの失敗」が類似する内容と考えられる。「女性との接し方で迷った・困った」は女性との接し方に関する内容で、渡邊（2017）の「女性への振る舞い方の領域」に該当すると考えられる。先行研究では、MGRSの「女性への従属」が類似する内容と考えられる。「自分の女性的な振る舞いに対して悩んだ・指摘された、性別を分けることに疑問を持った」は、伝統的な男性役割からの逸脱や、男女で役割を分けることに関する内容であった。このエピソードは、渡邊（2017）の「心身の強さの領域」のうち、伝統的な男性役割の「女性的言動の回避」に関する悩みとして考えられる。先行研究では、該当する因子はみられなかった。

続いて、上記のエピソードごとに認知や感情のカテゴリーに関する数量化Ⅲ類を行った。その結果、3つのクラスターが抽出された。第1のクラスターは、男性役割に沿うことはできない、必要ないと思い、プレッシャーに感じながらも、社会がそうだからと、仕方なく受け入れているという「消極的受容」であった。このクラスターは、全発言の37.1%（633

件)が該当した。第2のクラスターは、人に良く思われたいため、男性役割に沿う行動をやりたい、必要だからやるという「肯定的感情・取り入れ」であった。このクラスターは、全発言の30.0% (511件)が該当した。第3のクラスターは、男性役割に沿うことに疑問を覚え、悩んだり、嫌な気持ちになったり、つらいと思ったりする「否定的感情・拒否」であった。このクラスターは、全発言の32.9% (561件)が該当した。

第3のクラスターは、海外の先行研究で検討されてきた、男性役割による葛藤やストレス (Eisler & Skidmore, 1987; O'Neil et al., 1986) に相当すると考えられる。現代の日本人男性においても、男性役割を意識すると、男性役割に沿うことを否定的に感じたり、拒否したりすることが明らかにされた。また、先行研究の多くは、gender role strain paradigm (Pleck, 1981, 1995) に則っており、男性役割によるネガティブな影響にのみ焦点化されていた。これに対して、本研究では、第1、第2のクラスターにみられたように、男性役割によるネガティブな影響以外も明らかとなった。特に、第2のクラスターは、男性役割によるポジティブな影響と考えられ、臨床現場 (Englar-Carlson & Kiselica, 2013; Kiselica & Englar-Carlson, 2010) や教育現場 (知念, 2013; 土田, 2008) における男性役割の有用性の議論を裏付けるクラスターとも考えられる。

以上を踏まえ、3種類の認知や感情のクラスターのプロットから軸を解釈すると、2軸は、正の方向に肯定的な感情が布置され、負の方向に否定的な感情が布置されたことから、「肯定—否定」の軸と解釈される。3軸は、正の方向に受容が布置され、負の方向に肯定的および否定的感情が布置されたことから、「受容・諦め—強い感情・反応」の軸と解釈される。次項では、これらの解釈に基づき、男性役割意識化時の認知や感情の違いを考察する。

男性役割意識化時の認知や感情の違い

前項で述べた認知や感情に関して、対象者の属性、男性役割意識化エピソードおよびその時の相手による違いを検討した。

対象者の属性に関しては、3軸において「社会人」が正の方向、「大学生」が負の方向であった。また、属性別の χ^2 検定の結果において、「社会人」では、「家庭内での振る舞いを考えた・指摘された」エピソードや、「働かなくてはいけない・職場で悩んだ」エピソードが多く、「大学生」では、「リーダーシップをとったり、しっかりしないといけないと思った」エピソードや、「勉強・進路・就職・将来について悩

んだ」エピソードが多かった。これらの結果から、大学生は、リーダーシップや将来のことにに関して男性役割を意識しやすく、肯定的または否定的な強い感情を抱いたり、取り入れるまたは拒否するなど、強く反応しやすいと考えられる。一方、社会人は、仕事や家庭での振る舞いに関して男性役割を意識しやすく、受容したり諦めたりしやすいと考えられる。青年期は、キャリアを探索する時期であり、自分の興味や能力と合うか試したり、仕事に就くために努力する時期である (茂垣, 2013; Super, 1957)。一方、青年期は、親に依存している時期でもある (岡田, 1999)。このため、青年期にある大学生は、進路や就職というキャリアの課題や、親からの自立 (自律) という問題において、「男性としてどうあるべきか」と感じ、積極的に取り入れたり否定したりしながら、役割実験を行っている (茂垣, 2013) と考えられる。一方、社会人になると、企業に就職したり、結婚し子どもを持つことで、仕事や家庭において担うべき役割が増えたり、責任が大きくなる。実際、奥田 (2015) では、仕事と育児を両立することに生きがいを感じつつ、葛藤を抱えている社会人男性の存在が指摘されている。これらを踏まえると、社会人男性は、仕事や家庭で役割を担うことに直面し、待ったなしの状況で、戸惑いつつ受け入れるしかないことが多いと推察される。ただし、こうした発達的な変化については推測にとどまっており、今後検証する必要がある。

男性役割を意識したエピソードに関しては、2軸において、「働かなくてはいけない・職場で悩んだ」が正の方向、「自分の女性的な振る舞いに対して悩んだ・指摘された、性別を分けることに疑問を持った」が負の方向であった。また、 χ^2 検定の結果において、前者は社会人で発言が多く、「否定的感情・拒否」の発言が少なかった。後者は属性による差はみられず、「否定的感情・拒否」の発言が多かった。この結果から、働くことや職場での悩みは、社会人男性が感じやすいものの、比較的肯定的に捉えやすいと考えられる。一方、自分の女性的な振る舞いに対して悩んだり、性別を分けることに疑問を持つことは、年代を問わず、一部の男性が感じており、否定的に捉えやすいと考えられる。多賀 (2006) は、現代の日本人男性が、稼ぎ手の責任を負うことに疑問を持ちつつ、仕事を辞めるという選択はしないと指摘しており、働くことや職場の悩みは、社会人男性にとって当たり前であり、ネガティブなものとして捉えられていない可能性がある。一方、女性的な振る舞いや性別への疑問は、自らの男性性への脅威や男性性の揺らぎと捉えられ、年代を問わず男性に

として否定的に捉えられやすいと推測される。

男性役割を意識したエピソードのうち、自分で意識したエピソードは全体の59.9%であり、他者から求められたエピソードは40.1%であった。大学生は、友人、先生から男性役割を求められることが多く、社会人は、妻・元妻、上司・先輩、同僚・周りの人から男性役割を求められることが多かった。自分自身で意識したエピソードに関しては、大学生と社会人ともに一定数みられた。次に、男性役割を意識した時の相手の有無に関して、「自分」と「他者」の2カテゴリーで分析した。その結果、2軸において、「自分」が正の方向、「他者」が負の方向であった。また、 χ^2 検定の結果において、「勉強・進路・就職・将来について悩んだ」エピソードのみ、「大学生」で多く、「他者」が多かった。さらに、「他者」のエピソードは、「消極的受容」が少なかった。高校生から大学生にかけては、キャリアを探索する時期（茂垣, 2013; Super, 1957）にあり、進路や将来のことに關して、他者に相談したりアドバイスを求めることが多い。しかし、ベネッセ教育総合研究所（2006）では、男子生徒が、進路指導の場面で他者の意見を十分に聞かず、狭い視野から進路選択をしていることが明らかになっている。これらを踏まえると、大学生は、これまで進路や就職を考える中で、「男性としてどうあるべきか」を意識させられたが、他者の意見をあまり聞かずに、「消極的受容」が少なかった可能性が考えられる。

サイズ因子がみられた1軸においては、「大学生」、「他者」が正の方向、「社会人」、「自分」が負の方向であった。ただし、エピソードに関する属性と相手の χ^2 検定では有意な連関はみられなかった。したがって、大学生も社会人も、自分自身で男性役割に沿わなければならないと思ったエピソードも、他者から男性役割に沿うことを求められたエピソードも、同程度に発話したが、それらのエピソードに関する認知や感情については、大学生の方が、あるいは、他者から男性役割に沿うことを求められたエピソードの方が、語られやすかったと考えられる。

本研究の意義と今後の課題

これまでの研究では、主に、伝統的な男性役割による葛藤やストレスといったネガティブな影響にのみ焦点が当てられ、男性役割を社会からの期待として捉えていた。このため、現代の日本人男性が、どのような場面で、誰から男性役割を求められ、どのように捉えているのかが詳細に明らかになっていなかった。本研究により、大学生は、リーダーシップや進路、就職に関して男性役割を意識し、社会人は、

仕事や家庭での振る舞いに関して男性役割を意識しやすいことが明らかとなった。また、仕事に関して男性役割を意識した場合、比較的肯定的に捉えられやすい一方、進路や就職、自らの女性的な振る舞いや性別を分けることへの疑問は、否定的に感じやすいことが示唆された。日本では、男性が、どのような場面で男性役割を求められ、どのように感じているかに関する知見が乏しかったことを踏まえると、本研究の知見は、男性役割研究を拡張することに貢献したと考えられる。

その上で、今後の課題として以下の点が考えられる。第1に、男性役割に沿わなければならないと思った時の3種類の認知や感情について、多くの男性を対象に量的な調査を行い、男性役割による男性への影響の実態を把握することである。第2に、先行研究では、男性役割による葛藤やストレスを感じる男性ほど、精神的健康が悪化していた（e.g., Cournoyer & Mahalik, 1995）。本研究の結果も踏まえると、男性役割を意識した時、否定的に感じ拒否する男性において精神的健康が低下し、肯定的に感じ取り入れる男性の精神的健康は悪化しないことが予想される。こうした予想について、今後、量的な調査によって検証していく必要がある。第3に、男性役割に沿わなければならないと思った時の認知や感情の違いによって、男性の行動が変わるかどうかは、明らかになっていない。男性役割の葛藤やストレスは、女性への暴力やセクシュアル・ハラスメントに結びつくという海外の知見（Mellon, 2013; Moore & Stuart, 2005; Smith, Parrott, Swartout, & Tharp, 2015）も踏まえると、今後は、男性役割に沿わなければならないと思った時の認知や感情と、二者関係や集団における振る舞いの関連を検討する必要がある。

引用文献

- ベネッセ教育総合研究所（2006）. 進路の相談相手データが語る高校の実像4 Retrieved from https://berd.benesse.jp/berd/center/open/kou/view21/2006/10/04data_jituzo_01.html (2019年3月22日)
- 知念 渉 (2013). 非行系青少年支援における「男性性」の活用——文化実践に埋め込まれたりテラシーに着目して—— 部落解放研究, 199, 41-52.
- Cournoyer, R. J., & Mahalik, J. R. (1995). Cross-sectional study of gender role conflict examining college-aged and middle-aged men. *Journal of Counseling Psychology*, 42, 11-19.

- Eisler, R. M., & Skidmore, J. R. (1987). Masculine gender role stress: Scale development and component factors in the appraisal of stressful situations. *Behavior Modification, 11*, 123-136.
- Eisler, R. M., Skidmore, J. R., & Ward, C. H. (1988). Masculine gender-role stress: Predictor of anger, anxiety, and health-risk behavior. *Journal of Personality Assessment, 52*, 133-141.
- Englar-Carlson, M., & Kiselica, M. S. (2013). Affirming the strengths in men: A positive masculinity approach to assisting male clients. *Journal of Counseling and Development, 91*, 399-409.
- 林真一郎 (2005). 男性役割と感情制御 風間書房
- Kiselica, M. S., & Englar-Carlson, M. (2010). Identifying, affirming, and building upon male strength: The positive psychology/positive masculinity model of psychotherapy with boys and men. *Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training, 47*, 276-287.
- Levant, R. F., Wimer, D. J., Williams, C. M., Smalley, K. B., & Noronha, D. (2009). The relationships between masculinity variables, health risk behaviors and attitudes toward seeking psychological help. *International Journal of Men's Health, 8*, 3-21.
- Mellon, R. C. (2013). On the motivation of quid quo sexual harassment in men: relation to masculine gender role stress. *Journal of Applied Social Psychology, 43*, 2287-2296.
- 茂垣まどか (2013). 社会に出るための模索 岡本祐子・瀬瀬裕子 (編), エピソードでつかむ 生涯発達心理学 (pp.122-125) ミネルヴァ書房
- Moore, T. M., & Stuart, G. L. (2005). A review of the literature on masculinity and partner violence. *Psychology of Men & Masculinity, 6*, 46-61.
- 内閣府 (2014). 「女性の活躍推進に関する世論調査」の概要 女性の活躍推進に関する世論調査 Retrieved from <http://survey.gov-online.go.jp/h26/h26-joseikatsuyaku/gairyaku.pdf> (2019年3月26日)
- NHK (2014). 男はつらいよ2014——1000人「心の声」—— クローズアップ現代 No.3538 2014年7月31日 (木) 放送 Retrieved from <http://www.nhk.or.jp/gendai/articles/3538/1.html> (2019年3月26日)
- 岡田 努 (1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, 47, 432-439.
- 奥田祥子 (2015). 男性漂流——男たちは何におびえているか—— 講談社
- 奥田祥子 (2016). 男という名の絶望——病としての夫・父・息子—— 幻冬舎
- O'Neil, J. M., Helms, B. J., Gable, R. K., David, L., & Wrightsman, L. S. (1986). Gender-role conflict scale: College men's fear of femininity. *Sex Roles, 14*, 335-350.
- Pleck, J. (1981). *The myth of masculinity*. Cambridge: MIT Press.
- Pleck, J. (1995). The gender role strain paradigm: An update. In R. F. Levant & W. S. Pollack (Eds.), *A new psychology of men* (pp.11-32). New York: Basic Books.
- Rice, S., Fallon, B., Aucote, H. M., & Möller-Leimkühler, A. M. (2013). Development and preliminary validation of the male depression risk scale: Furthering the assessment of depression in men. *Journal of Affective Disorders, 151*, 950-958.
- Rice, S., Fallon, B., & Bambling, M. (2011). Men and depression: The impact of masculine role norms throughout the lifespan. *Australian Educational and Developmental Psychologist, 28*, 133-144.
- Sharpe, M. J., & Heppner, P. P. (1991). Gender role, gender-role conflict, and psychological well-being in men. *Journal of Counseling Psychology, 38*, 323-330.
- 品川由佳・内野悌司・磯部典子・岡本百合・黒崎充勇・兒玉憲一・・・吉原正治 (2007). 男子大学生における性役割葛藤と情動開示の程度及び精神的健康との関連 総合保健科学 広島大学保健管理センター研究論文集, 23, 67-74.
- Smith, R. M., Parrott, D. J., Swartout, K. M., & Tharp, A. T. (2015). Deconstructing hegemonic masculinity: The roles of antifemininity, subordination to women, and sexual dominance in men's perpetration of sexual aggression. *Psychology of Men & Masculinity, 16*, 160-169.
- 総務省統計局 (2011). 生活時間に関する結果の概略. 平成23年社会生活基本調査——調査の結果結果の概要—— Retrieved from <http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/pdf/gaiyou2.pdf> (2019年3月26日)
- 総務省統計局 (2017). 平成28年社会生活基本調査——生活時間に関する結果—— Retrieved from <http://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/pdf/>

gaiyou2.pdf (2019年3月26日)

- Super, D. E. (1957). *The psychology of careers: An introduction to vocational development*. Oxford, England: Harper & Brothers. (スーパー, D. E. 日本職業指導学会 (訳) (1960). 職業生活の心理学——職業経歴と職業的発達—— 誠信書房)
- 多賀 太 (2006). 男らしさの社会学——揺らぐ男のライフコース—— 世界思想社
- 田中俊之 (2015). 男がつらいよ——絶望の時代の希望の男性学—— KADOKAWA
- 土田陽子 (2008). 男の子の多様性を考える——周辺化されがちな男子生徒の存在に着目して—— 木村涼子・古久保さくら (編), ジェンダーで考える教育の現在 (いま) ——フェミニズム教育

学をめざして—— (pp.62-77) 解放出版社

- 海原純子 (2016). 男はなぜこんなに苦しいのか 朝日新聞出版
- 和田 実 (2006). 男性役割葛藤, 男性役割規範意識と性および心理変数との関連 人間学研究, 4, 53-76.
- 渡邊 寛 (2017). 多様化する男性役割の構造——伝統的な男性役割と新しい男性役割を特徴づける4領域の提示—— 心理学評論, 60, 117-139.
- Wester, S. R., Christianson, H. F., Vogel, D. L., & Wei, M. (2007). Gender role conflict and psychological distress: The role of social support. *Psychology of Men & Masculinity*, 8, 215-224.
- (受稿3月29日：受理5月23日)